

音楽の往来と子供

、東洋音楽学会からの報告、

永原 惠三

一、はじめに

一九九二年十月三日、四日の両日にわたってお茶の水女子大学を会場として、東洋音楽学会第43回大会が開催された。本稿はその第一日に本学講堂の徽音堂で行われた公開講演会に關しての報告である。

社団法人東洋音楽学会（以下東洋音楽学会と記す）

は、日本音楽学会と共に日本における音楽学研究の一端を担う学会である。日本音楽学会が音楽研究の様々な分野を全般的に包括するのに対して、東洋音楽学会は分野的にはそれに含まれるが、活動としては独立しつつ相互

關係を保っている。対象は主として日本及びアジアの音楽で、会員は国内外の東洋音楽の研究者のみならず西洋音楽の研究者、さらに伝統音楽の演奏者などによって形成されている。

二、統一テーマ「音楽の『往来』と接点」

今回の東洋音楽学会第43回大会がお茶の水女子大学で開催されるに際して、全体統一テーマを「音楽の『往来』と接点」と設定した。「往来」という言葉には、交流やコミュニケーション等のような情報や物流を表現す

る言葉とは異なつて、何か温かい生身の人間と人間との行きかい、それも閑散とした人の流れではなく活気にあふれた人々の動きを示している。そしてその中で様々なすばらしい出会いが生じることをほめかしているように思われる。音楽は地域や時代、文化を横切つて様々な仕方では会い、そしてそこに様々な接点が生じる。このことは日本やアジアの中だけのことではなく、世界の至るところの音楽に見られることでもある。特に日本人にとつて自らの日本伝統音楽、そして近隣諸国の音楽のみならず、というよりもむしろそれ以上に西洋音楽との関わりは大きな意味をもっている。いったい日本人にとつて西洋音楽とはどのようなものであるかという問いもまた必然的に生じて来る。この問いについては様々なアプローチが可能であろう。

そのアプローチの一つとしてお茶の水女子大学は、日本の音楽受容のあり方、言い換えれば日本における音楽の「往来」と接点の一つの例を示していると考えられる。その理由として次の二点が挙げられよう。つまり東

京の地域性とお茶の水女子大学自体の意味である。まず東京という土地は、伝統音楽と外来音楽との出会いが関西とは異なつた仕方で行われたところである。つまり伝統邦楽に西洋音楽の新しい手法を導入した多くの作曲家達が存在することであり、またそれと共に伝統邦楽の内部でも新たな創造の可能性を目指した作曲家達が存在することである。この点に関しては、今回の学会では『現代邦楽作品の系譜―その変化の諸相をめぐつて』というテーマによる公開演奏会で、その過程を実際に提示した。お茶の水女子大学もまたこの様な東京に立地している以上、直接間接に影響を受けずにはいられなかつたはずである。

次にもう一つの理由としてのお茶の水女子大学自体の意味は、日本の音楽教育の中での重要性である。すなわち、本学は日本の教育の草分け的存在として、特に明治以降の音楽教育において、一般の学校教育の中における音楽に深くたずさわってきた経緯がある。つまり初等教育をはじめとする全ての子供達のための音楽教育のあり

方に関係してきたのである。それは芸術大学などの関与する専門家養成のための音楽教育の次元とは異なった、草の根的な音楽の場での関わりである。そしてそのような人間の生活の中の根源的な場で東西の邂逅が行われたことに大きな意味があり、お茶の水女子大学自体の音楽教育における重要性が明らかになるのである。その意味で音楽教育史上、明治九年に日本で最初に本格的な幼稚園として開園した東京女子高等師範学校附属幼稚園は特に重要である。

周知の通り、この幼稚園は、一八四〇年にドイツのF・フレーベルによって開かれた世界最初の幼稚園(Kindergarten)を模範としてつくられたもので、日本の他の幼稚園はこれに倣うものとなったが、音楽教育的にはこの幼稚園で行われた教育の中で唱歌教育並びに遊戯が重視されたことは注目すべき点である。それは明治に入ってまだまもなく、音楽取調掛(現東京芸術大学)の開設される前のことであった。この幼稚園の教材である『保育唱歌』の編纂が行われたのは、L・W・メーン

ンによる『幼稚園唱歌』や『小学唱歌集』の編纂以前のことなのである。この『保育唱歌』の大部分の曲は、既に洋楽を学んでいた宮内省雅楽課に作曲を依頼してつくられたものであった。この様にして官立の幼稚園という全く公的な教育の場で洋楽が日本人と出会い、接点を持ったのである。そしてここに明治以降の日本の音楽教育の原点を見ることができよう。つまり教育という公的な場において西洋音楽の積極的な導入が、いわば上からの立場で実践されたのである。

このような趣旨において開催された今回の東洋音楽学会の公開講演会では特に『音楽の往来と子供』と題して、お茶の水女子大学附属幼稚園を中心として、我々の生活の最も身近なかつ最も重要ともいえる次元での音楽の往来を、二人の講演者に語っていただいた。すなわち海老澤敏氏(国立音楽大学学園長、日本音楽学会会長)、および柴田南雄氏(放送大学客員教授)の両氏である。

三、『ルソー・幼稚園・お茶の水』

まず海老澤敏氏からは『ルソー・幼稚園・お茶の水』と題した講演が行われた。そこでは一般にジャン・ジャック・ルソー作曲として知られる唱歌『むすんでひらいて』を手がかりとして、それが日本に広く歌われるようになった過程で東京女子高等師範学校附属幼稚園（現お茶の水女子大学附属幼稚園）がどのような位置にあったかが語られた。この講演の詳細に関しては、すでに海老澤氏の著書『むすんでひらいて考』（一九八六、岩波書店）ならびに、その母体となる稿が本誌（『幼児の教育』）に連載された。海老澤氏は本誌がその前身である『婦人と子ども』からの長い歴史をもち、とりわけお茶の水女子大学及び東京女子高等師範学校の関係者により刊行され続けた研究雑誌であり、そこに『むすんでひらいて』の初稿が23回にわたって連載されたことに大きな意義を強調している。また海老澤氏は「感想」という表現をしているが、むしろそこに海老澤氏自身の音楽観がルソーを通して見えかくれするように思えるのであ



る。それはルソーの様に人間を深く愛することから現れる音楽への確固たる確信の態度であろう。ルソーの夢が東京女子師範学校で百年以上も前からはぐくまれ実現した意味の大きさを氏は強調する。ルソーは18世紀の人であり『むすんでひらいて』の旋律ができたのも18世紀、さらにそれが伝播したのは19世紀である。そして幼稚園

がフレーベルによって開かれたのも19世紀のことであった。18世紀には従って幼稚園はなかった。ルソーは五人の子供を捨てたことで批判されるが、海老澤氏は、「おそらくルソーの思いの中に子供がたくさんつどって楽しく歌ったり遊んだりする姿があったと信じる。ルソーは子供の純真な世界に対して愛をかたむけ不朽の教育書『エミール』を書いた」と語る。この様に幼子を深く愛したルソー、そしてそのルソーの夢を実現した幼稚園、そしてお茶の水という三点が『むすんでひらいて』という実に小さな、しかしとても大きな曲の中に見いだすことが出来ることを、海老澤氏は語っていたのではないかと思われる。

海老澤氏は『むすんでひらいて考』のあとがきにおいて、音楽美学者のツッカーカンドゥルの遺作ともいうべき『音楽者としての人間』(“Man the Musician”, 1973)に言及している。氏は「……著者が、〈音楽性〉とは何かを問い、本当の音楽性とは、いわゆる音楽的才能に恵まれ、かつ専門的に訓練されることで獲得される排他的な

能力や技術ではなく、全ての人間に内在する資質として捉えていることはまことに印象深い」(注1)と述べて人間と音楽との密接な関係を示唆している。さらに、「ツッカーカンドゥルの指摘する、この人と人との、そして人と事物との(一体化)、『同体性』、そして(一致)、これこそ、二世紀をこえる昔、かのジャン・ジャック・ルソーが、当時、すでに頂点に達していたかに見える芸術音楽の暴虐を危惧し、弾劾しつつ、音楽の本源的な在り方として早くも主張してやまなかったものではなかったろうか」(注2)として、ルソーとツッカーカンドゥルとの深いつながりを明らかにしながら、ルソーの中にある温かい人間性を示唆しているのである。そしてそのようなルソーであったからこそ、「伝ルソー」(海老澤氏による)の旋律が世界中、そしてまた全くの異文化の地である日本においてもすでに百年以上もの間、幼児たちによって歌われ遊戯がなされてきたのであろう。

一つの曲のもつグローバルな意味が子供の歌の中に見いだされることには大きな意義があろう。つまり『むす

んでひらいて』という小さな一つの曲が西洋という別の文化を日本にもたらしたけれども、その影響は芸術音楽のそれとは比較にならないほどに大きいものであった。

それは受け入れる側のコンテキストの根源的な広さ、すなわち幼稚園という最も基本的教育の場であったこと、

それと同時にその曲の担っていたコンテキストの広さが対応するであろう。そしてこのそれぞれのコンテキストを結ぶ重要な役割を果たしたのが、他ならぬ東京女子高等師範学校及びその附属幼稚園である。ある意味で『むすんでひらいて』の西洋におけるコンテキストは東京女子師範学校に一旦収斂し、そこから再び日本国内へとコンテキストを拡大したとも言えよう。そしてまたこれほどにコンテキストが広がった根底にあったもの、つまりこの『むすんでひらいて』という曲が、確かにルソーの作曲ではないにしても、そのルソーによる原曲が様々な形で西洋世界に広がった、その根底にあったのは、実はルソー自身の音楽に対する根源的な考え方に他ならないのではなからうか。すなわち心から心への素直な伝達行

為、人と人とを隔てるのではなくむしろ結び付けるものとしての音楽の優しさ、そして人間の愛情の深さを、ルソーの音楽は宿していたのではないかと思われるのである。

四、『大正時代の保育唱歌』

柴田南雄氏による講演は『大正時代の保育唱歌』と題して行われた。柴田氏はその音楽教育の最初を東京女子高等師範学校附属幼稚園で受け、逆にお茶の水女子大学音楽科をはじめとして、その作曲家、音楽学者としての広範な活動において、伝統音楽を自らの手中に収めつつ、西洋現代音楽の最先端の技法を日本に紹介したのである。そのために邦楽器を用いた作品もかかっているが、柴田氏の作品でとりわけ重要なのは合唱のためのシァターピースであり、それは様々なレベルでの教育的意義をも含んでいる(注3)。

講演は、柴田氏自身の幼稚園時代である大正時代の保育唱歌のいくつかを実際に復元を行い、海老澤氏の講演

で示された明治以来の幼稚園での唱歌教育の流れを受け継ぐ形で、当時の唱歌教育を音楽の往来の中に位置づけるものであった。柴田氏はまずフレーベルについて、その幼稚園 (Kindergarten) が世界的に新しい運動として広まり、日本においても東京女子師範学校附属幼稚園という官立の幼稚園の基本理念となり、それ故にまた日本の幼稚園全体にゆきわたったことに、その大きな意義を見いだすと共に、そのような一つの教育に関する説があまねく広がったことの希有性を指摘している。またフレーベルが音楽を重視した背景に、H・G・ネーゲリ (注4) がいたことに目を向けている。このようなフレーベルの理念は、その導入にあたっては初代園長の関信三が翻訳を行うなどして大きな貢献をしたが、その後実際に日本というやはり文化の根底の異なる土地で実践されるに従って、次第に相対化されることとなるのは当然であった。そこで大正六年から園長を務めた倉橋惣三の行った様々な改革は、「新たに日本にふさわしい幼稚園教育をしようとした考えのあらわれであろう」と柴田

氏は述べている。講演の中では明治一六年につくられ同二〇年に刊行され、同三四年に改訂された『幼稚園唱歌』の曲を実際に演奏し、またその内の三曲については遊戯を復元することによって、音楽としての様に西洋的要素と日本的要素が混在していたかが具体的に示され



た。まず柴田氏自身の記憶に遊戯をして歌ったことが強く残っていたものとして、『風車』^{かざぐるま}が取り上げられた。

この曲の作詩は保母の豊田芙雄^{ふゆ}、作曲は宮内省の令人により、雅楽と同じく律音階すなわち君が代と同じスタイルをもっている。またこの曲の遊戯が再現されたが、柴田氏自身は当時マニュアルにない動作をしていたが、それはおそらくフレールの遊戯が、「子供の生き生きとした精神を呼び起こしたのだろうか」と語っている。しかしこの『風車』のようなものばかりでは、フレール流のダイナミックな遊戯に適合しないためか、明治三四年の改訂版では滝廉太郎の曲が主流となった。これらの曲はすべて西洋のクラシック（特にハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン）のスタイルであるトニカ（主和音）、サブドミナント（下属和音）、ドミナント（属和音）の連続で統一されて作曲されている。今回はこの滝廉太郎の曲が16曲メドレーで演奏された。これによっていかにそれらの曲が類似しているかが明らかになったのである。また遊戯は『風車』、『鳩ぼっぼ』、『水あそ

び』^びが高松晃子（本学人間文化研究科）の協力によりフレール会編纂の『幼稚園遊戯』^{幼稚園遊戯}（明治四〇年発行）などに基づいて、本学音楽科学生有志によって再現された。

五、むすび

こうして二つの講演から、明治から大正期にかけての東京女子高等師範学校附属幼稚園において歌われそして遊戯の行われた音楽が、子どもの音楽という次元で東西の往来と接点を実現していたことが明らかになったのである。またその実現の場合こそが、それ以降現代に至るまでの日本の音楽状況、特に西洋音楽受容のあり方の方向性を示す一つの原点と考えられよう。単に過去の実事を回顧するのみならず、それが現代にとっていかなる意味を持つかを考えることが重要である。従って今回の講演が、現代を生きる我々にとって西洋音楽と日本の伝統の關係のみならず、さらに文化としての音楽、教育、そして子どもという観点で西洋と日本の「往来」を考える一

つの手がかりとなれば幸いである。

最後に、今回の東洋音楽学会第43回大会を開催するにあたって、本学家政学部児童学科の本田和子教授には多大な御尽力を戴きましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。

(注)

1、海老澤敏『むすんでひらいて考』岩波書店、一九八

六 P. 357

2、同書 P. 358

3、柴田南雄のシアターピースについての教育的意義については拙稿「日本の音楽教育における合唱―柴田南雄の作品を中心にして―」（『待兼山論叢』第24号美学篇、25―46 一九九〇）参照。

4、H・G・ネーグリ（二七七三―一八三六）はスイスの音楽教育家、作曲家また楽譜の出版者。歌曲や合唱曲を作曲し、自らも合唱団を組織。またベスタロッチの音楽教育理論を支持。本講演では『白バラのおう

夕べ』が例示された。

（参考文献）

海老澤敏 一九八六『むすんでひらいて考』岩波書店

「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会編、一九八四

『お茶の水女子大学百年史』「お茶の水女子大学百年

史」刊行委員会

フレールベル会編 一九〇七『幼稚園遊戯』フレールベル会

遠藤宏、一九五〇『滝廉太郎の生涯と作品』（音楽文庫

11）音楽之友社

（お茶の水女子大学文教育学部音楽科）